

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02911

研究課題名(和文) 意味と身体化に基づく英語教授法の提案

研究課題名(英文) A proposal of English teaching method based on cognitive embodied experience

研究代表者

濱本 秀樹 (Hamamoto, Hideki)

近畿大学・国際学部・教授

研究者番号：70258127

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：言語の習得と運用には身体化認知経験が関わることは定説となっている。本研究では日本人学習者にとって障害となる英語の文法事項のうち、仮定法、現在完了進行形、定冠詞、同義的形容詞(high/tall, big/large)などの意味と用法を身体化認知に還元して指導する方法を研究した。多くの言語実験により蓄積したデータを分析した結果、身体化認知と言語理解、運用を結合した教授法には通常の規則の記憶による学習法よりも明らかな優位性があり、学習者の多くは「分かった！」感を伴った英語学習を経験したと報告している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

身体化認知経験の英語教育への適用とは、言語の習得と運用には身体化認知経験が関与するという考え方に基づく新しい英語文法教育の方法を検証するものである。初年度は既存の知見を整理することと言語実験を繰り返し、データを蓄積した。2年目以降、基本データを利用して具体的な教授方法を考案しさらに実験を繰り返しその成果を学会で発表した。概ね好意的な評価を受けた。学習者にとって英語の文法学習は「そうになっている」という形で規則を与えられ、その反復練習で習得に至るという道筋が既存の方法である。これに対し身体化認知に還元された文法学習は「分かった」感を伴うものであり、今後の英語文法学習の道を開くものである。

研究成果の概要(英文)： Based on widely accepted view that cognitive embodied experiences might be (at least partially) involved in language acquisition and use, this research examined a method to teach Japanese learners of English such grammatical hurdles as hypothetical conditionals, present perfect progressive, definite article, synonymous adjectives (high vs. tall, large vs. big etc.).

Analyzing the data accumulated through many linguistic experiments showed a relatively strong correlation between cognitive embodied experiences and language comprehension as well as performance. Many of the experiment participants testified that they were able to understand the grammatical issues such as hypothetical conditional statements, the present perfect progressive satisfactorily for the first time with this method.

研究分野：応用言語学

キーワード：身体化認知 認知意味論 英語文法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

この研究開始当初、英語教育界では英文法における意味論の関わりと身体化認知の必要性の理解について不十分なところが認められた。まず、意味論に関わる分野には問題が山積していた。具体例を示そう。英語の現在完了進行形の意味については教科書では「発話時点において当該動作が継続中でさらに継続の見込みを持っている」という説明が一般的である。しかし現実の使用事例を見れば、「Keiko has been practicing violin for many years since I can see that from her violin bruise.」“Somebody has been sitting in my chair, and it's now broken.”など発話時点で当該動作が終了し、ただその継続動作の影響が明確に現在の状態に認められるようなものが多数ある。このような意味的説明不足では学習者の英文法理解には程遠いと思われた。

もう一つの問題は、英文法の習得と学習者の動作の関係である。一般にジェスチャーは教授者の補助的教授手段とみなされてきた。しかし学習者も身体動作経験により意味の中核的部分を体感できることが身体化認知意味論では提唱されている。具体例を挙げると、「仮定法過去」、「仮定法過去完了」で学習者が疑問に思うのは、なぜ「過去形」で現在の反実仮想状況を記述し、「過去完了」で過去の反実仮想状況を描写するのかという点である。既存の文法説明では、時制的に「過去形」であっても仮定法過去は法的に現在の仮想状況を指し、時制的に「過去完了形」であっても法的に過去の仮想状況を示す、ということになる。これはほぼ同義反復的であり、説明になっていない。結局、学習者はそうなっているのだから記憶すればよい、ということになる。しかしこれも可能世界意味論、メンタル・スペース理論の反実仮想理解と身体化認知意味論的の適用により身体動作の複合によって合理的に説明可能である。

## 2. 研究の目的

英語文法理解で障害になる幾つかの事項について学習者に身体化認知経験を組み込んだ教授法を実施しその成果を実験的に検証することが研究目的である。

各文法項目は[form-meaning-function]に適切な値が与えられて初めてinputがintake化されるという基本的想定がある。またこの[form-meaning-function]の関係付けには身体化認知経験が必要とされ、これにより言語形式と意味、および機能との関連付けが自然に促進されると考えられる。この研究は上記の点について検証することにある。各文法項目の深い意味論的考察により実用的な意味的説明を確立し、身体化認知経験によって文法形式とその意味、機能との対応を構築する手法の有効性を検証することを目指した。

## 3. 研究の方法

日本人の英語学習者の困難に感じる英文法の事項のうち、現在完了進行形、反実仮想文、空間形容詞(high/tall, big/large など)について形式意味論、認知意味論から説得力ある意味現象の説明を先ず構築することに努めた。その後、この意味論的理解を身体化動作と組み合わせた教授方法を考案した。この新方式経験した実験群と、通常の方式の文法説明を受けた対照群との共通テストの成績の比較を行った。

## 4. 研究成果

一連の言語実験の結果を既存の理論と対比的に検証し、応用言語学会で研究発表を行った。空間形容詞と現在完了進行形の意味特性の整理とその身体化認知経験に還元された指導法についてはポルトガル応用言語学会(Aprolinguas Port 2018)で"Applying Embodied Cognition Approaches to L2 Learners"というタイトルで口頭発表し、電子ジャーナルに掲

載されている。要約すると、現在完了進行形の中核的意味は 動作の過去における継続の存在、その継続動作の現在への関連、の 2 点から考えられ、現時点でもまだ継続中の解釈 (A) 以外に、終了した継続動作の影響が現時点で見られる場合 (B) にも解釈可能である。このことを (A) と (B) の特徴が顕著に表れるスキットを多数準備し、学習者に演じさせる (身体化経験) ことで自動的に適切な意味解釈ができるようになる。

また反実仮想文の意味論とその身体化認知経験に基づく教授法はハワイ大学ヒロ校での英語英文学学会 (International Conference on English Language and Literature, 2020) で "Instruction of English Counterfactuals Based on Cognitively Embodied Experience" というタイトルで口頭発表を行った。これは論文掲載に向け準備中である。この研究では If+過去形 は現実世界と並行する可能世界への意識の移動を表しその世界での文意の成立を表現すると考える。また If +過去完了形 は可能世界とその過去への意識の推移の 2 つのメンタルの動きを表現すると解釈し、学習者は実際にこの動きを身体化する。このことにより構文のもつ意味が素直に経験される。

どちらのケースでも既存の文法指導を受けた対照群と新方式の実験群との共通テストの成績の比較分析を実施した。実験群の方が統計的に有意な成績をあげ、これにより身体化認知経験に基づく文法指導方式の有効性が確認できたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 濱本秀樹	4. 巻 15
2. 論文標題 2つの結果構文	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近畿大学大学院紀要『混沌』	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hamamoto Hideki	4. 巻 1
2. 論文標題 Applying embodied cognition approaches to L2 learning	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 FLUP Association (Aprolinguas)	6. 最初と最後の頁 167-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.21747/9789898969217/paraa9">https://doi.org/10.21747/9789898969217/paraa9</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Hideki Hamamoto
2. 発表標題 Applying cognitive experience to L2 teaching
3. 学会等名 Aprolinguas 2018, University Porto（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hideki Hamamoto
2. 発表標題 A proposal of Methodology for Teaching Japanese Onomatopoeic Expressions based on Sound Symbolic Theory
3. 学会等名 Applied Linguistic Association Australia and New Zealand（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hideki Hamamoto
2. 発表標題 The effects of syntactic gestures on memorization and retention of learners of English
3. 学会等名 Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hamamoto Hideki
2. 発表標題 Instruction of English counterfactuals based on cognitively embodied experience
3. 学会等名 hawaii International Conference on English Language and Literature (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hamamoto Hideki
2. 発表標題 Rendering untranslatable culturally specific words translatable using frame semantics
3. 学会等名 Translation, Inclusivity, and Educational Settings (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 河上、濱本、吉村、加藤	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 822
3. 書名 否定の博物誌(Lorence Horn, Natural History of Negationの翻訳)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----